

天の妙華

お浄土には美しい天華があめふつている。お浄土の人たちは、その美しい華を、花皿に盛つて、他方十萬億の仏たちに御供養してまわるといふ。これは一体何を意味するのであろうか。華嚴經の普賢行願品には、普賢の十大行願を説く中に、第三には「広修供養」をあげてある。

男である。それに長い間になれたのか、非難にも攻撃にも、迫害にも嫉妬にも、あまり心が動かなくなつた。昔の侠客ではないが、人間は時にこの身を八裂きにされても涙一滴落とさないかも知れない。だが、真実だ。恐ろしいのは真実だ。わずかに動く真実にも、大の男が動かされる。真実ならざる心の動きから出たあらゆる力は、ほんとうの意味では人を動かすことは出来ない。

ここは△△支部である。団員のほとんどが無産者である。美しいお座敷もなければ、お上品な料理もない。お大家にあるような作法もなければ、高雅もない。

だがここにこそ、虚飾をすてた「人間」の世界がある。

「先生、私たちのような貧乏人ばかりが、先生をとりまいて……………」

それで値打ちが下るとでもいうのか。この地第一の大富豪と私とが何の関係があるのか。この地第一の門閥家と私に何の交渉があるのか。人類平等の大義に立脚したまいし釈尊の聖教に順おうという我等に。

私はここに美しい殿堂を求めて来たのではない。金力、権力、等々を求めて来たのではない。唯々、真実を求めて……………否、諸兄弟たちの、くめども尽きぬ真実に動かされて来たのではないか。家のせまく、むさくるしさを歎き、サービスの至らざるを苦しむ皆様の尊き熱き心こそ、又しても私を涙の中に沈黙合掌せしめるではないか。人間の華ここにあり。天の妙華ここにあり。

人間はただ真実の華咲く中にこそ、身命をすら棄てようとする。

我執の毒をまき散らすのか、天の華を供えるのか。物を与ふれども、天の華を供養せず。終日語れども無功德の声、天の華の香なし。凡情、遂に、誰にも、何ものをも供養せず。供養することは難い哉。

供養することはむずかしい。されど、供養を供養として受けることは更に困難である。物は欲深く受け取るが、供養を供養として受け取らない。供養の中には、天の妙華が入れられてある。合掌の中にこの華がある。供養を供養として受ける心も亦合掌の心である。真実は唯、真実に通う。

真実以外の何物をも怖れてはならない。まごころ以外の何ものをも拝んではならない。まごころのない心をはじねばならない。まごころが動いていない時、恐ろしい毒刃が動いている。

天の妙華が毒刃の上に降る。毒の刃は、消えてゆき、解けてゆく。妙法蓮華は唯、法華宗だけの独占であろうか。首の座に剣をちりぢりに折るもの、唯日蓮上人一人のみであろうか。

地上の人間のはからいの動く所、天の妙華は汚される。天の妙華の汚されるにあらず、人間の醜さが、醜さのままにおわるのみ。維摩の方丈に天の妙華あめふる。菩薩大土の上に降る華はそのまま降り下るも、二乗の世界を出でざる舍利弗の上に降る華は、体についてはなれず、ふり落さんとすればするほど体をはなれない。ふりはなさんとする心、すでに人間の執着、はからいである。人間のはからいをつくるどころ、天の妙華の昼夜六時に雨降るを知り得るか。

み法に生きる心、すなわち天の妙華をそのままに受け入れる心である。

我、合掌の日を生のよろこびにひたる。

念仏なるかな。

念仏こそ一切を解決する。